

平成27年度博士後期課程学位論文審査報告書

平成28年2月19日

審査員 (署名)	(主査) 玉井 健一	高宮 朝則
	奥田 和重	伊藤 一

学位論文提出者	学 生 番 号	氏 名
	201383	谷祐児

1. 学位論文題目

中小規模病院に特化した病院経営変革に関する研究

2. 論文概要

別紙

3. 所 見

別紙

(1) 論文テーマの重要性

(2) 論述の一貫性

(3) 先行研究及び関連分野に関する理解

(4) 研究方法の妥当性

(5) 独創性

(6) 体裁

4. 評 価

(1) 論文審査合否 : 合格 不合格

(2) 最終試験合否 : 合格 不合格

【別紙】

2. 論文概要

本論文は、病院研究の中で研究蓄積の少ない中小規模の民間病院に焦点を置き、変革に必要な固有の組織的・戦略的要因を探索しながら変革ロジックの構築を試みた研究である。

第1章で上記の研究目的を提示した後、第2章では先行研究のレビューを行っている。まず、これまでの病院研究に関する課題を提示し、中小規模病院の経営変革に接近した研究がほとんどないことを指摘している。次に、組織論の中のコンテンジェンシー理論の観点から不確実性の高い状況に適応する組織構造や意思決定システムの必要性を見だし、中小規模病院固有のコンテキスト要因から生じる環境変化への対応の重要性を指摘している。

最後に、中小規模病院における環境変化への適応を特徴づけるために、組織変革論が提示する変革対象の内容、および変革の目標を根拠づける戦略概念が考察されている。そこでは、目標達成のための戦略立案を組織変革と理論的に結びつけ、競争優位の確保に向けた組織変革が重要であることを見いだしている。これに加え、中小企業の組織論および組織行動論の知見を援用しながら、中小規模病院が小規模であるがゆえに確保できる独自の競争優位に向けた変革のアプローチがあることも見いだされている。

第3章では、先行研究から得られた知見に基づき、中小規模病院の経営変革アプローチをアプローチの方向性（内部指向・外部志向）とアプローチの内容（戦略的・組織的）の2次元から捉えた独自の分析フレームを提示し、4つのタイプの変革を理論的に明らかにしている。そして、4つのタイプの変革アプローチを統合的に推進している中小規模病院が高い業績や環境適応を果たしているという仮説を設定している。

第4章と第5章は実証研究である。第4章ではアンケート調査による実証分析であり、中小規模病院75施設のサンプルに対する施設概要、経営計画、組織体制、外部連携、マーケティング活動の特徴を分析するとともに、それらの経営パフォーマンスおよび外部環境への適応との関係を分析し、4つの変革アプローチの有効性が検証されている。

第5章は、ケーススタディによる分析である。本章では、第4章の分析では明確にならなかった経営変革アプローチを支える具体的な要因を特定化している。調査対象として、変革により適応力を高めていると考えられる典型的な4病院がケース対象企業として選択され、インタビュー調査と公開された資料、および4章で利用したアンケートから得られた情報の分析が行われている。分析結果として、4病院の4つの変革の固有性や共通する側面が明らかになり、中小規模病院における4つの変革タイプに属する重要な要因が識別されている。引き続き第6章では、第5章で提示した変革アプローチの成功には、売上志向よりも利益志向の経営が必要であることが事例研究を通じて明らかになっている。

第7章は、実証研究に基づく理論的考察が行われている。ここでは、第3章で示したフ

フレームワークの有効性を再確認しながら、内部志向・戦略的アプローチにおける戦略論的解釈、内部志向・組織的アプローチに対する組織構造論的解釈、外部志向・戦略的アプローチにおけるマーケティング論的解釈、外部志向・組織的アプローチのネットワーク論に基づく解釈がなされ、優れた中小規模病院の変革は、4つのアプローチの組み合わせとして理論的に説明可能であることを指摘している。

第8章は、本論文の結論に当たる。全体の内容を要約した後、理論的インプリケーションとして、本論文で提示した組織変革の独自のフレームワークが、中小規模病院の戦略論および組織論における変革研究の理論的発展に貢献することを指摘している。また、実践的インプリケーションとして、外部環境への適応力を実証するために開発した指標は、中小規模病院の目指すべきパフォーマンス指標となるため実務的に活用可能であることを指摘している。最後に、今後の課題として中小病院のパフォーマンスである収益性に関わるデータの厳密な取り扱いの必要性、および、サンプルの地域的なバイアスを排除する必要性が指摘されている。

3. 所見

(1) 論文テーマの重要性

本研究は、医療現場の最前線を担う社会的に重要なポジションにありながら、大規模病院と比べて研究蓄積の少ない中小規模病院のマネジメントに焦点化し、同病院が直面する急激な環境変化の中での戦略的かつ組織的な変革要因の抽出とその体系を明確にしようとするテーマを設定しており、リアルな中小規模病院経営の実態の理論化を志向した重要な論文テーマであると考えられる。

(2) 論述の一貫性

明確な研究目的の設定に加え、研究目的を達成するための記述が論文全体を通して一貫している。各章のつながりも論理的に構成されるに加え、各章内での論述も明確な論点に基づいて展開することができており、論述における問題はない。文章も読み手に伝わるような正確かつ厳密な記述を心がけている。

(3) 先行研究及び関連分野に関する研究

本論文では、これまでの病院経営に関わる多数の研究をレビューし、それらの研究の理論的・分析的な課題を明らかにしている。このような批判的視点に基づき、中小規模病院の変革の体系を明らかにするためには、普遍性の高い組織論および戦略論からの接近が必要であることを認識し、中小規模病院に適用可能な概念や考え方を有する組織論、戦略論の研究がレビューされている。このことから、十分な先行研究および関連分野に関する研

究を検討することができているといえる。

(4) 研究方法の妥当性

組織論と戦略論に依拠しながら中小規模病院への理論的な接近を図るとともに、理論検証の方法としてサーベイ調査とそれを補完する形のケーススタディ調査を行っている。このような研究方法は、論理実証主義に基づいたオーソドックスな方法であり、研究方法の妥当性が確保されているといえる。

(5) 独創性

本論文の独自性は、組織論および戦略論の理論的観点から中小規模病院を分析する独自のフレームワークを開発していることにある。同フレームワークは、「戦略的・組織的」、「内部志向・外部志向」の2次元から構成されているが、中小規模病院の変革を特徴づける複数の項目を含んでおり、同病院における組織変革の大きさのみならず、変革タイプの差異を定性的に捉える独自の指標としても高く評価される。

(6) 体裁

中小規模病院の理論開発に必要な問題意識の設定に基づき、問題意識に対応した組織論、戦略論のレビューを行っている。また、先行研究から理論的に導かれた分析フレームと仮説を提示しており理論レビューから仮説を導出するためのオーソドックスな手続きを踏むことができている。さらに、実証研究においてもアンケートデータの分析およびそれを補完する形のケーススタディを通じて、最終的にこれらの検証から得られた分析結果を分析フレームに位置づけており、妥当な検証手続きを踏んだ理論化が行われている。以上のことから、全体を通じて論文の体裁は妥当なものであると判断できる。